

平成 27 年 12 月 5 日 (土)

長野遺跡群 県町遺跡（後町小学校地点）現地説明会資料

遺跡名 長野遺跡群県町遺跡
調査地 長野市大字南長野（西後町）603
調査原因 後町小学校跡地活用整備事業
調査期間 平成 27 年 9 月 14 日～

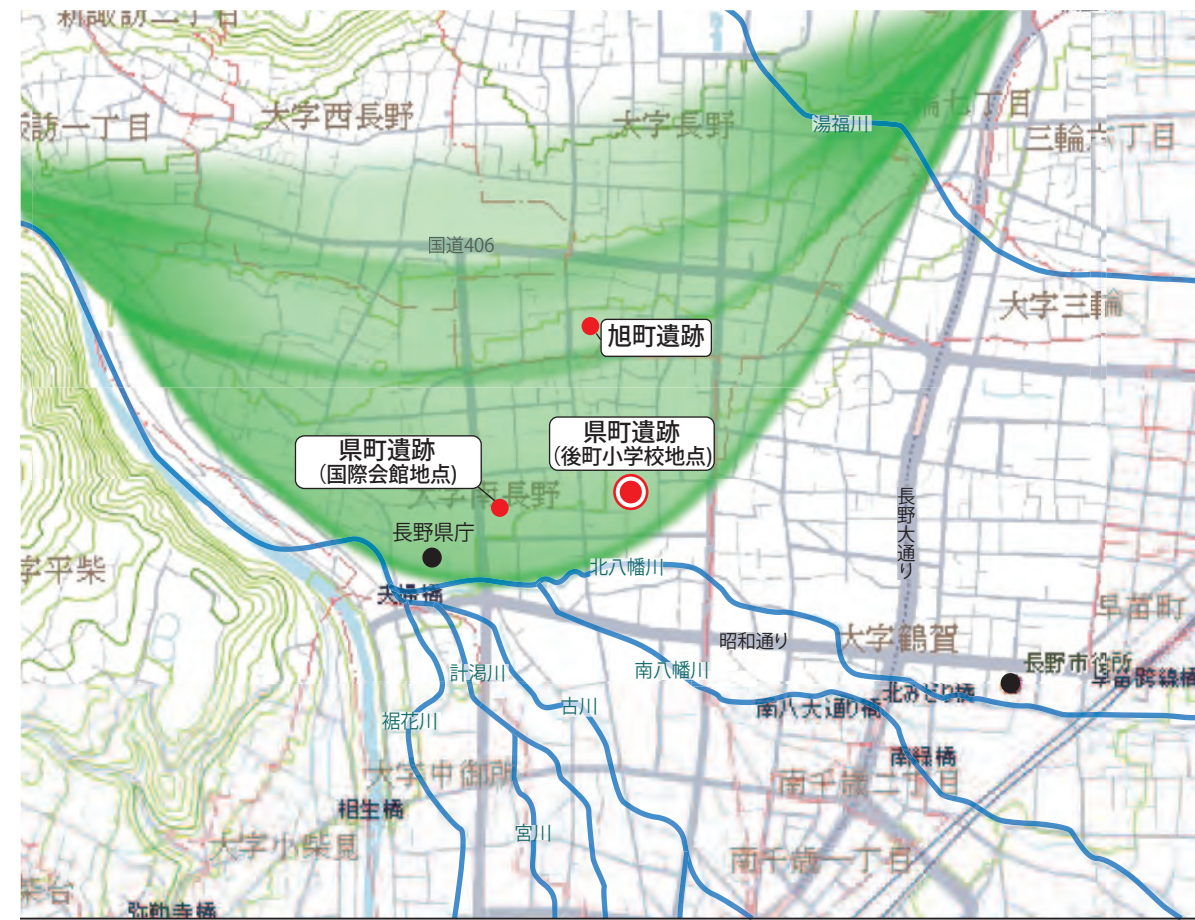
長野市教育委員会文化財課
長野市埋蔵文化財センター
〒 381-2212 長野市小島田町 1414 番地
電話 026-284-0004 FAX 026-284-0106
電子メール maibun@city.nagano.lg.jp
ホームページ <http://bunkazai-nagano.jp/>

◆ 調査の概要

平成 25 年 3 月に閉校となりました後町小学校の跡地を活用する事業に先立ち、9 月中旬から約 1,900 m²の発掘調査を行っています。現在 A 区と B 区の 2 次面の調査をほぼ終了し、弥生時代中期の竪穴住居跡 3 軒、弥生時代後期の竪穴住居跡 1 軒、奈良時代～平安時代初頭の竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 2 条などが検出されました。

◆ 県町遺跡と周辺の歴史

長野市街地は、奈良・平安時代には信濃国水内郡に属していました。善光寺の前身寺院は奈良時代にはすでに存在したようで、後町周辺に古代の官道があったと想定されています。遺跡周辺に残る「後町」という地名は、鎌倉時代に善光寺周辺にあった「後庁」の音が残り



県町遺跡の位置と周辺の遺跡 1/15,000

■ 河岸段丘
— 旧河道

漢字が変化したとされています。後庁とは、鎌倉時代の国府(国の役所)の出先機関の名称です。また、後町小学校の東には「出世大仏」で有名な十念寺があり、中世の善光寺門前町の南端とされていますので、後町周辺が古代・中世を通じ重要な地域であったことがわかります。

◆ 河岸段丘上に営まれた遺跡

県町遺跡周辺は、湯福川と裾花川の扇状地が複合した地形で、さらに裾花川によって形成された河岸段丘が見られます。河岸段丘とは、川の侵食による段差のある細長い地形で、上から下に行くに従い、形成された時代が新しくなります。県町遺跡の上の段丘には、旭町遺跡という縄文時代中期(約 5,000 年前)の遺跡があります。現在長野市立図書館が建っている場所で、昭和 59 年に発掘調査されました。



打製石斧 (旭町遺跡) 土中に埋められた縄文土器の中に 7 本の打製石斧が納められていました。

タカラガイ形土製品 (旭町遺跡)
長さ約 7 cm、中心に穴が貫通しており、首飾りであったかもしれません。

～県町遺跡（国際会館地点）～

長野遺跡群県町遺跡は、昭和 44 年に長野市県町で国際会館が建設される時に初めて調査が行われました。そこでは古墳時代後期～平安時代(約 1,500～1,000 年前)の遺跡が発見され、奈良時代の硯「蹄脚硯」が出土し注目されました。この硯は主に役所や寺院など事務を行う場所で使用されていたもので、他に出土した金銅製の帯金具とともに、県町遺跡が役人など身分の高い人々と関係した可能性を示しています。周辺の歴史的背景とも考え合わせて、善光寺周辺が水内郡の郡家(郡の役所)の推定地の一つにあげられています。



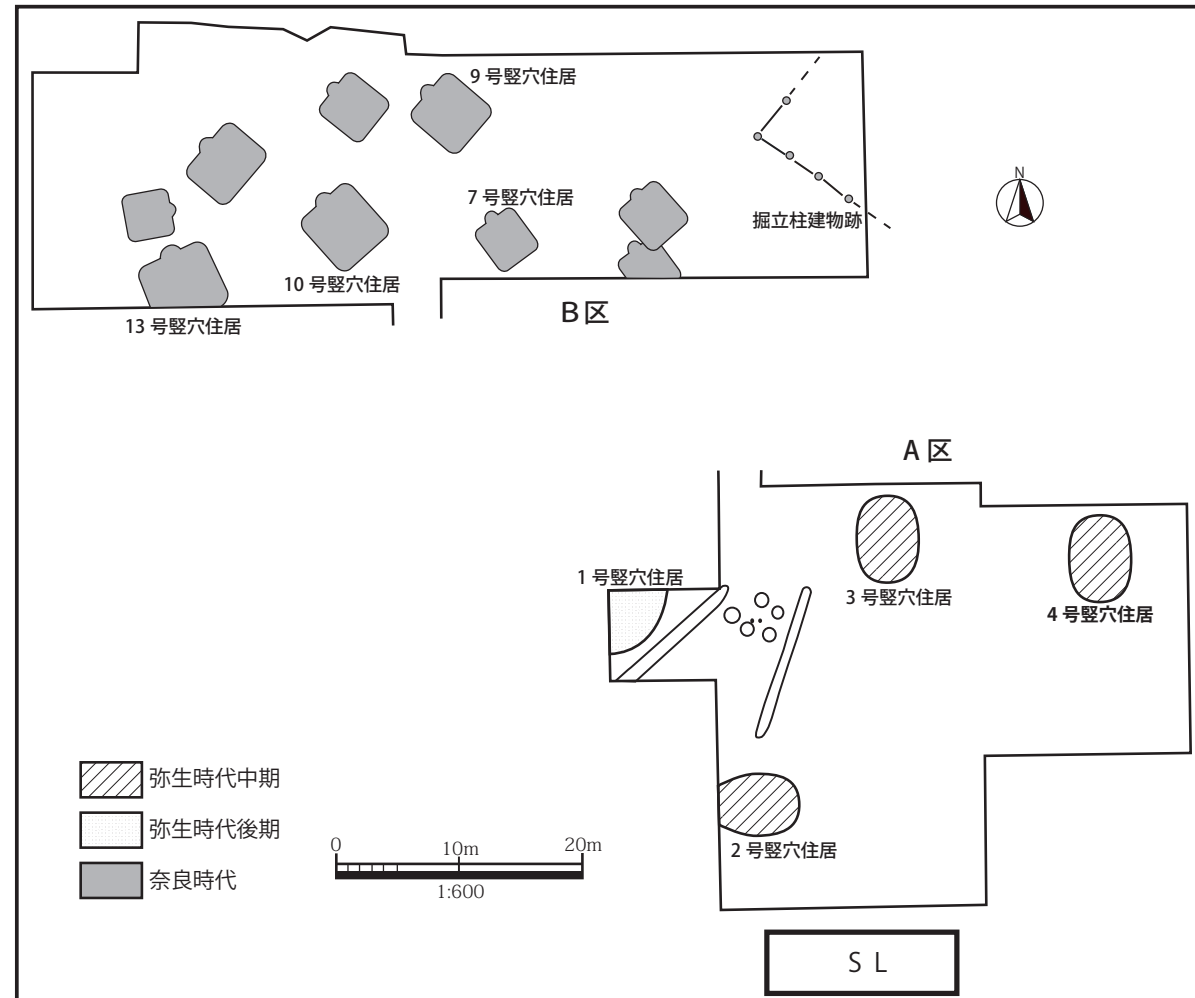
蹄脚硯 (県町遺跡国際会館地点出土)



役人の仕事風景 当時役人は「刀筆の吏」と称されました。木簡を仕事に使用し、間違いを修正するのに小刀で削っていたからです。(奈良国立文化財研究所編『長屋王「光と影」展』)

◆ 県町遺跡後町小学校地点の調査成果

県町遺跡の後町小学校地点は、過去の調査と同様に古墳時代～平安時代の遺跡が発見されると推定されていました。ところが、奈良時代～平安時代初頭（約 1,200 年前）のほかにも、弥生時代中期（約 1,900 年前）と後期（約 1,800 年前）の竪穴住居跡も発見されました。奈良時代の住居跡は北の B 区に集中し、弥生時代の住居跡は南の A 区で検出されました。



遺構配置図

～発見された弥生集落～

今回の調査で発見された弥生時代中期の竪穴住居跡からは、真っ黒に焼けた家の部材が出土し、家の壁や床が熱を受けていました。何らかの原因で火事になった住居「焼失住居」であることがわかりました。またこのうち2軒は掘り込みの深さが60cm以上あるため遺存状態が良く、土器などが多く残されていました。住居の上屋構造や弥生時代の人々の生活を知る上で貴重な発見となりました。



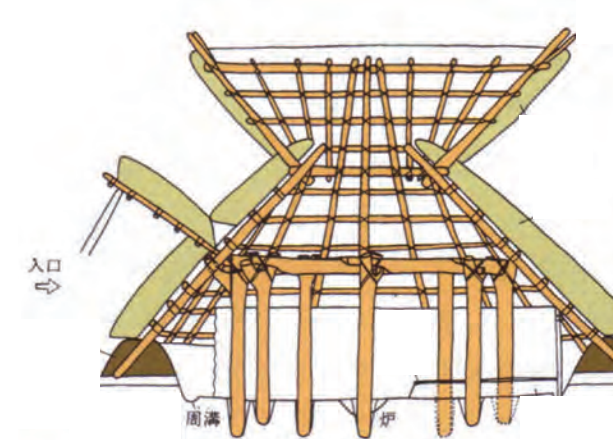
焼失住居 (3号住居跡)



住居の床に並ぶ弥生土器 (4号住居跡)



焼失住居 (2号住居跡)



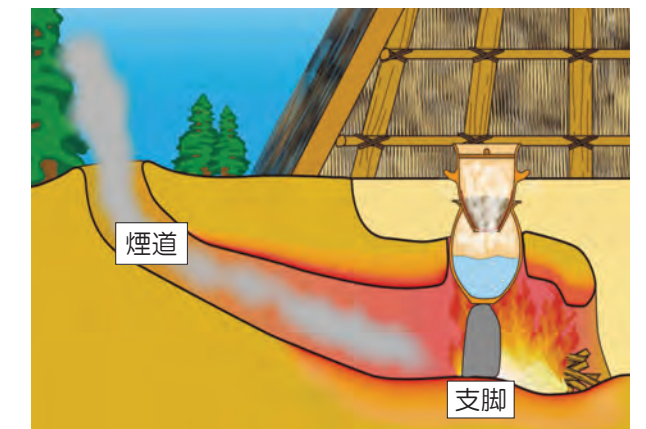
竪穴住居の構造

～奈良時代の集落～

B区からは竪穴住居跡9軒と掘立柱建物跡が見つかりました。住居跡の多くは北西にカマドを持ち、カマドに付属する煙道がはっきり残るものもありました。住居跡からは奈良時代～平安時代初頭（約 1200 年前）の土器が出土し、その頃に人々が集落を営んでいたことがわかります。国際会館地点で出土したような蹄脚硯が製作されるのは奈良時代中期（約 1,250 年前）からとされていますので、B区の住居跡は国際会館地点とほぼ同時期の集落となります。また、9号住居跡から出土した稜椀は、役所や寺院などの遺跡から出土する特殊な器です。後町小学校地点の付近に、古代の役所や寺院などが存在した可能性を示しているのかもしれませんが。



煙道の残されたカマド (9号住居跡)



カマドの構造